

山内昌之

東京大学名誉教授

運と歴史

人は運で決まるか

富裕と貧困という問題は「運」で決まるのか

今日の私の話は、「運」というものはどういうものかについてです。歴史における「運」について語ってほしいということがご希望でした。歴史家としてはなかなか難しい注文です。

中国の古代に莊子、列子という思想家がいました。この人たちは要するに、物事の流れるままに「運」というものも進んでいくのであって、結果として金が貯まる、あるいは貯まらないで貧乏になるのはいかんともしがたいと考えます。それ以前に、「そもそも歴史の流れとはそういうものなのだ」と恬淡^{てんたん}としている。このような人たちもいたわけですが。

ところが反面、古代ギリシアの思想家のなかには、最初から富裕という問題と貧困という問題について考える人もいました。

問題は「運」というもので万事が決まるのか、あるいは「運」とは異なる歴史の要素（すなわち努力、教養、道徳など）で決まるのか、ということと思想家は分かれるのです。たとえば、中国における「諸子百家」と呼ばれる思想家たちでも、孔子や孟子、それから先ほど出てきた莊子、その師匠筋にあたる老子などによっても、すべて違います。

では、「運」とは何かということ、どう考えるか。その際には、ソクラテスあたりから考えるとわかりやすいと思います。

岩波文庫でいちばん薄い本とは何か、ご存じですか。あるいはご記憶にある方はいますか。われわれの世代は高校時代から大学一年くらいにかけて、岩波文庫の薄いほうから読むのがいいということで、当時の子どもたちは薄いものから読んでいました。そうすると、二つの性格の違う本を読みます。

一つは、マルクスの『共産党宣言』です。もう一つは『ソクラテスの弁明』という、プラトンなどが編んだとされる本です。『ソクラテスの弁明』が収められた本にはもう一つ、『クリトン』という別の作品が入っている。この二つは当時の子どもたちに比較的人気があって、成長過程で（高校から大学に入っていくなかで）読んでいきました。

「運」とはいいことばかりではない——ソクラテスの「運」から考える

ソクラテスは紀元前五世紀に生きた人ですが、彼がなぜ毒を仰いで死ぬことになったかという点、告発されたからです。やや品のない日本語でいうと、不条理な「因縁」をつけられたからです。アテネ（アテナイ）の若者たちを墮落させたという罪で告発されたので

す。

これは非常に乱暴な告発です。その告発者に対して、ソクラテスはこういったわけです。「なんとたいへん不幸な運命を君はばくに認定してくれたものだ（私にとって非常に不幸な運を認めてくれたものだ）」と。

これは『ソクラテスの弁明』にある最も有名な記事の一つです。ソクラテスは自分の運が悪いということを確認していたのですね。

運が悪いだけではなく、死刑判決にまで至るといふプロセスが、いかにも不幸な運命です。運命自体が不幸なわけですが、こういった不幸な運命を本人が正確に予知していた点が、われわれ凡人と違って、ソクラテスのすごいところだったのです。

彼の親友に、先ほど出たクリトンという人物がいます。このクリトンはソクラテスについて、「その人生全体において幸せな性分の人だと思ってきた」といい、実際に彼（ソクラテス）が死刑を待つだけの日になっても、そうした考え方を変えなかったというのです。

今、直面している死刑宣告ほど不運なことではないでしょう。そういう不運のなかでも、いとまたやすく穏やかにソクラテスは耐えている。嘆いたりすることもない。調子外れになることもない。悪びれることもない。

ここで私たちは、自分たちと重ねてみましょう。死刑宣告を受けて、われわれの心は平坦でいられるのかどうか。もちろん、「告発者は自分にひどい運命を与えてくれた。そして、大変な悪い運命に自分は陥ったものだ」という言葉には皮肉が入っているわけです。だけれど、年齢のおかげでソクラテスは悩むことがなかったというのです。

「他の人もそうかもしれない」といいますが、実際、他の人はそうではないのです。このように不幸な運命に陥った、あるいは自分が生きてきたなかで、あまり良い運ではないものに最後に遭遇した。最後にそういった運に出くわしたとき、皆はつらい気分になるということです。

「運」「運命」とは、いつてしまえばそういうことなのです。良い運ばかりではない。日本語で簡単にいうと、「良運」という言葉もあるし、「悪運」という言葉もあるし、「悲運」という言葉もあります。ですから、「運」というものは決していいことばかりではないということなのです。

「果報は寝て待て」と「人事を尽くして天命を待つ」

もう一つ、よくいわれる言葉で、皆さんもよくおわかりの「運も実力のうち」という言葉があります。

たとえば、人事のシーズンになると、どの会社やどの官庁でもソワソワしだす。そして、同期の人間が第一選抜で出世する、あるいは局長になる。自分はならなくて、だんだんと枝葉のように切られていく。

そうしたときに、悔しい思いを秘めつつ、「しかし、運も実力のうちだから」などという。自分にだって実力があると、皆、自負している。だけれども、自分が局長や第一選抜で残らなかったのは「運」のせいだと納得する。

そのレベルの人間たちになると、彼我の関係を平等に、公平に見ようとする余裕や悟りめいた理解力もありますから、「運も実力のうちだな」といい聞かせるわけです。

あまり良い運に恵まれたとは思わない人でも、いつも思うのは「果報は寝て待て」という教えです。これはこれで、いわば積極的な生き方なのです。

あまりガツガツしないで、人を追い落としたり、人を排除したりするのはなく、いつてしまえば「人事を尽くして天命を待つ」。この「人事を尽くして天命を待つ」という感覚に近いかなと思います。

実のところ、何もしないでは果報は来ません。後から触れますが、これが今日の大きなテーマです。「何かをする」「努力する」「道徳的に恥ずかしくないことをする」。そうすると「人事を尽くして天命を待つ」ことになって、いい意味で「運を頼りにしている」ことにもなる。

これは非常にオプティミスティック（楽観的）な考え方に見えるかもしれませんが、私は、「悲運や悪運が自分には来ない」と信じることは生き方として非常に大事なことだと思うのです。

金運というものに対して関心がない人間もいる

普通の人間の「運」というものを考えてみましょう。これについては後からいろいろな歴史的な例を出します。

たとえば「金運（金の運）」というものがある。金はどれだけ欲しいと思っても限りがない。ですから、金運はそもそもその内容についても果てしがありません。

私の場合には金運に恵まれていなかったといえるでしょう（笑）。そもそも金運というものに対して関心があり、金に対して執着心のある人間は、私が選んだような学問の職業には進まないでしょう。研究室には頻繁にあれこれ勧誘の電話がかかってきます。「先生、良い話がありまして……」と。「悪いけれど、私は興味がない」「え、先生、お金に興味がないのですか。金儲けに興味がないのですか」「ないよ」。そうすると、「変な人ですね。

世の中に金に関心ない人がいるのですか」というわけです。

私も、たとえば大好きな森伊蔵を飲みたいくらいの欲望はある。大好きな江戸前寿司を月に一回ほど食べに行く。それくらいの余裕があればいいので、それ以上のことは日常生活で関心がない。「こういう感覚で仕事をやっている」というと、なんとなく納得してくれません。学者には変なやつが多いのだな、と思って要領を得ない形で引き下がっていきます。

江戸文化「狂詩」の教え——運はめぐってこないときもある

いくら工夫しても恵まれない運、最初から関係のない運もあるわけですが、たとえば、にっちもさっちもいなくなってお金が必要になる場合、自分が「運」に恵まれないと不幸を嘆く人たちもいるのは事実です。

文化文政から天保の頃の時代、一九世紀の頭です。將軍の世紀でいうと徳川第二一代將軍・家斉の時代です。五〇年間の將軍の治世で、側室が三〇、四〇人、できた子どもが五〇人以上という、とんでもない將軍がいました。この時代は投資や金儲けに非常に関心が増した時代、消費文化が非常に彩りを見せた時代でした。

この時代に、金などに対する執着でにっちもさっちも行かなくなった自分の身上（身の上）の悪さに掛けて皮肉った狂歌を書いた者がいます。狂歌とは五・七・五・七・七で行なう諷刺や諧謔の歌です。有名な狂歌師には大田蜀山人（南畝）などがいます。

また、狂詩というものもあります。狂詩とは何かというと、漢詩です。漢詩を狂歌のように、非常に皮肉まじりに、あるいは自己卑下的に書いていく文化があったのです。ある狂詩家（匿名で安穴先生）の作品を一つ、紹介しておきます。

「唐練の身上 糸の端を切る 運来たらざる時 只応に誤（謝）るべし」

これは漢詩なのだけれど、実際ふざけた詩なので、こういったジャンルを江戸では「狂詩」といいます。

どういう意味かというと、要するに自分は運が悪く、あやつり人形などの糸が切れて動かなくなったり、あるいは動かせなくなった人形に自分の身上（運の悪さ）を掛けています。そこで、運が来ないときはひたすら低姿勢に徹して頭をペコペコ下げっぱなしにしなければ仕方がない、という自重の言葉です。

つまり、「運」というものは順調にめぐってくるとは限らない。この狂詩家は、そのこ

とを非常にペシミステックに書いたわけです。

運はめぐってこないときもある。そういうときはどうするか。「利息・利子をつけて金を返してくれ」といわれたとき、皆さんはどうしますか。「いやあ」といつて頭を下げる以外にないですよ。ペコペコ頭を下げて、「ちよつと待ってくれ、来週、来月には必ず払うから」と。映画の『ナニワ金融道』でも必ず出てくる台詞です。「来週まで待ってくれたら必ず返すから」と。

関ヶ原合戦の教訓——「運に恵まれる」にはどうすればいいか

運がめぐってきたときはどうするか。人間、これはまた非常に勝手なもので、「運も実力のうち」といつて当然視する。勝った側は「運も実力のうち」といい、負けた側は少し悔し紛れに「運も実力のうちだな。俺はちよつと運に恵まれてなかっただけだ」という。ビジネスマンや役人たちなら、このような気持ちはわかりますよね。

それでも、これを歴史的に見た場合、本当に「運も実力のうち」といえるかどうか。確かにいえる場合もあるでしょう。

誰でも知っている関ヶ原合戦を例にとると、数のうえでも、それから部隊の配置でも、圧倒的に有利だったのは西軍でした。この西軍が、なぜ負けたのか。東軍の徳川家康が勝つて西軍の石田三成の勢力がなぜ負けたのかという問題は、いろいろな解釈があります。これは、偶然に運だけが左右したのではない。強い運というものを、実は引っ張って行く、つまり、「運に恵まれる」「運も実力のうち」と語るには、実は自分自身がその強運を引いてくる努力をしなければいけないということの例なのです。

どういう努力か。家康は後に筑前（福岡）で五二万石を与えることになる黒田長政（黒田如水の息子）に対し、毛利の内部分裂を画策させていたわけです。すなわち小早川、吉川、それから毛利本家の内部を一体にさせずに、バラバラにさせるような政治工作、外交、陰謀を事前に行なっておく。こういった政治工作が実を結んで、小早川の裏切りが始まるわけです。

関ヶ原に行くと、岐阜関ヶ原古戦場記念館があります。歴史博物館です。そこへ行って私は思わず笑いました。家内と一緒にレストランに入ったのですが、そこで注文したのは「小早川の寝返り 裏切りカルボナーラ」です。これはいいなと思いました。もちろん、いちばん人気で、「今日は売り切れです、お客さん」といわれました。

その小早川です。裏切りで、陣を置いていた松尾山から下りていった。毛利の本家はどうなったかというと、南宮山からまったたく下りなかった。下で戦争をやっているのに、結

局は知らんふりして下りない。このようにして内部分裂を誘ったのです。

つまりここでは、運は運だけれど、黒田長政や徳川家康の運は「好運」です。幸いな運といってもいいけれど、むしろ「幸運」よりも「好運」。この「好運」を招いたのは、実は黒田長政の実力のせいだったということです。彼が外交工作や駆け引きや陰謀などを行なうことによって培った政治的な実力。これが「好運」を呼んだのです。

「運」は黙っていて来るものではありません。良いめぐりあわせが必要です。そして、そのめぐりあわせは、ある程度までは努力で引き寄せられるものだということです。

才能も実力も乏しいが運に恵まれて宰相に上り詰めた男

日本人のわれわれであれば、「幸運」(グッドラックの「ラック」という言葉はわかりません。もう一つ、「幸運」に似た言葉に「開運」があります。実は「幸運」は「開運」とは少し違うということを、歴史的には見ておいたほうがいいでしょう。

運と実力について、片方だけに恵まれているという人も、なかにはいると思います。実業家あるいは官僚として成功していく人には、運と実力の両方を兼ね備えている人も外見적으로는いるかもしれませんが、実はほとんどの人は片方だけで仕事をしている。運が良かった、あるいは実力はあった。しかし、よくよく見ていくと、そこには微妙な重なりがあるということに気がつきます。

例として、私の本業、もともとの職業としての学問、つまりイスラム史や中東国際関係史という世界に関わる逸話を少しお話ししたいと思います。

主人公はこういう人です。若いときは非行少年でしたが、後にある意味で成功した(日本風にいうと総理大臣までたどり着いた)人物の話です。

問題はどういう非行少年だったかということにあります。ただの非行少年だったら、後に成功はしない。非行少年だったけれど、どういうわけかこの人物は、他人に対して気前が良い、太っ腹、そして趣味といえば人にご馳走することで、人に会えば「メシを食わなにか」といって、とにかく人に奢るせがのが趣味だったのです。そういうことが幸いな人間がいました。

この太っ腹だけが取り柄だという非行少年は、アブー・アッサクルという人物です。この人物がどういう人間かは後で話すとして、彼はすこぶる幸運なめぐりあわせのおかげで、実力が追いつかないといってもいいのに、幸運には恵まれた人生をスタートさせたのです。

人に飯を食わせようという自分の楽しみから、彼はいわば幸運を引きました。幸運を引

いている人間は、そのうちに力もついてきて、いろいろな仕事もできるようになります。彼は宰相（総理大臣）までなりました。アッバース朝という王朝です。

アッバース朝は、八世紀から一三世紀まで、今のイラクからエジプトあたりを支配した大きな王朝でした。このなかで彼は第一五代のカリフ（イスラム王朝の皇帝）に仕えました。宰相になると予想した者は、同時代で誰もいませんでした。悪仲間、遊び仲間、悪友たちのなかでも、まずいなかった。

それで詩人であったイブン・アッルーミーは詩を書いています。日本風というと、悪太郎が運に恵まれて宰相になったことについて、「人の運は錬金術」という言葉（皮肉）を浴びせたのです。彼の詠った詩は、こういうものです。

「運というものが犬に触れると、犬を人間にしてしまう」

ずいぶんひどいことをいうと思いませんか。つまり、イブン・アッルーミーという詩人によると、「このアツサクルという不良少年、宰相にまでなった人間は、そもそも才能も実力も犬程度の人間でしかない。ところが、彼はなぜか運があった。そこで、運によって犬が人間になった」というのです。

ずいぶん厳しいことをいっていますが、これほど辛辣に宰相を揶揄しながら、まだ満足しないのです。詩人はこの政治家を批判し、彼をなんとしても失脚させようとして、さらに厳しい言葉を浴びせました。それが次に紹介する、この詩の続きです。

「お前は対等でもない幸運と結婚させられた。すると神は離婚によって幸運を守り給うたわ。お前が着用した幸運は神聖なるものとはなりえぬ」

ここにはある意味で、イブン・アッルーミーの運に対する考え方が出ています。

お前には、まったくふさわしくない、お前にとってそれを得る値もない、そしてお前は対等とはいえない幸運にお前は恵まれた。それを「幸運と結婚させられた」と、結婚という言葉で比喩化しているわけです。

しかし、神はそれほど不平等なことをしない。だから間もなく神は、お前をその運と離婚させた。運からお前を見放した。運から見放した結果、幸運というものが本当に行くべき人のもとに行くように、幸運の価値を守ったのではないか。お前がひととき着用した幸運は神聖なものではなかった、お前は神聖になるような人間ではなかったからだ、ということなのです。

自分の力を過信しないほうがよい

ちなみに、アブー・アツサクルはどういう意味か。サクルは「鷹」です。アブーは「父」という意味なので、「鷹の父」という意味になります。これこそ、俗にいう「名前負け」というものでした。

その後、このアブー・アツサクルの後に宰相の仕事に就いた人間は三人いましたが、いずれも二度、三度と更迭されて、またアブー・アツサクルが宰相の地位に戻りました。ジェットコースターを繰り返したのです。

宰相に就くというのは幸運だったのか、不運だったのか、わからないところがあります。いずれにしても、これは運も実力のうち。たしかに、運によって宰相になることもできました。これは幸運だったといえます。しかし、そこから滑り落ちて宰相の地位を失うと、「君の運は不運でもあったね」ということになる。しかし、また宰相になったとなると、やはり幸運だったのか、あるいは不運だったのかという試練を繰り返していくのです。

今、日本においても政界、そして一般市民の話題にもなるようなことですが、最近まで自民党の幹部は、自分たちに幸運あるいは不運などとりまぜて運がめぐって来るとは思わなかったでしょう。すべては安倍晋三元総理の死から始まった。そのときに、このような状態になるとは考えなかった。つまり、運というものは、イスラム風にいふとまさに神が与えたものです。それがジェットコースターのように幸運から不運の奈落に突き落とされるところは思わなかったことでしょう。

しかし今、われわれが直面している現代の問題を運という観点から見た場合、歴史的に自民党の試練のようなことはよくあるのであって、幸運と不運はあざなえる縄のごとく結びついているということなのです。

ですから、「自分の力だけで地位を仕留めた」と実力をあまりに過信すると、昔の人であれば「神に対する恐れを持っていない。神の思し召しがあったから幸運にめぐりついたのであった。しかし、神は公平だったから、幸運に値しない人間は必ず幸運から離婚させた。そこから突き放して不運というものを与えた」、ということになるわけです。

ですから、あまり自分の力をアブー・アツサクルのように過信しないほうがいい、ということもいえるわけです。

タイミングも開運の重要な要素

自分には力があるからといって、よく独立を考える人がいます。企業で志を持った人であれば、あるいはいろいろな点で独立自尊の精神を持ち、自らが独立したいと思うのは当然だと思います。しかし、そのタイミング、それから自分の力の本当の実態をわきまえることです。その独立のタイミング、「時」という、ある意味ではそこに運が関わる。これをきちんとしていないと、主家から離れることが——ここで「開運」というわれわれの言葉が生きてくるわけです——開運するとは限りませんね、ということになります。

このようにわざわざシニカルに警告したもので、われわれの身近な日本史から私が引張ってきたケースとしては、下野（今の栃木県）の真岡に大商家・塚兵がいました。その家訓を読んでみたところ、非常にうまいことをいっていました。

「はや独あるきの心出て主の元に向けて開運をするはまれなり」

丁稚奉公から手代になり、番頭にもなった、このようにして自分に力ができた。もうお前は早くも一人で自立するという心は出て、主家（主人）のところから逃げて開運するというのは本当に大丈夫か。主人の元から逃げて、そこで運が開けるといふケースはまれだよ、と。

これはなかなか厳しいビジネスリアリズムです。やはり独立するのも大変なのだよ、タイミングと運というものがあって実力だけではうまくいかないこともあるから、ということとをわかりやすくいっているわけです。

西郷隆盛や大久保利通は「博打」で戦争を行なったのか

そして、われわれの次なる疑問は、「すべては運か」ということです。

先ほど関ヶ原の戦いを例に出しましたが、ここでは鳥羽・伏見の戦いの例を考えてみましょう。幕末に薩摩を中心とした討幕勢力——最終的には薩長土（薩摩藩、長州藩、土佐藩）になりましたが、実際は薩摩です——と旧幕府軍が戦って、西郷隆盛・大久保利通らの薩摩軍が結局、旧幕府の軍隊を打ち負かしました。これが開運の始まりであって、徳川家は最終的に倒れて新政府ができました。

結局、西郷や大久保らは、「勝つも負けるも時の運」ということで一種の博打を打った

のかということですが。

戦争を博打のように行なったのは、戦前の帝国陸海軍の対米英戦争を例外とすれば、近世・近代においては非常に珍しいことです。博打であたった最大のケースが真珠湾攻撃ということになります。そしてマレー沖海戦です。これは開戦劈頭（へきとう）ではあたったのだけけれど、だんだんと国力を無視した博打があたりなくなってくる。博打でも最も重要な「運」というものをつかむためには、賭け金を切らさない財力などの実力がなければいけません。

本当の彼我の力の差を考えたら、日本がアメリカに勝つファクターは非常に少なかったといえます。生産力や補給力を含めてだんだんと国力が弱まってくるわけです。

一方、西郷たちの打ったゲームは博打ではないのです。そのときどきの運も考えなければ、それだけの準備を戦略的にも政治的にもきちんとしたということです。「運を天に任せる」という言葉はあるけれど、帝国陸海軍のようにただ天に任せる博打のような戦いをしたわけではありません。

徳川家康が「運の善し悪しは人知（人の知恵）ではどうすることもできない。だから関ヶ原の戦いでは成り行きに任せて勝ったのではない」のは、先ほど触れたとおりです。黒田長政などを使って政治工作もしたり、内部攪乱（かくらん）などもしたりする。そういうなかで勝利を得たのですから、偶然ではありません。

「運がすべて」という見方は妥当か

現代人ならば素直に受け止められないことは何か。「何でも運だ」という見方、「運ですべて決まってしまう」という見方は、受け入れられないことです。先ほどから語っているのは、そういうことなのです。ギリシア古典のなかには「人間の営みは、運であり思慮ではないと考える」という指摘がありますが、私はあまり同意できません。

たとえば、「すべては運で、思慮ではない」というギリシア古典の言葉を借りれば、現在のパレスチナ住民のガザにおける悲運、あるいは彼らの陥っている運命は、「運なのだから、考えることによって何か変えられるものでもない」ということになりかねません。本当にそのように考えていいのでしょうか。

この言葉はプルタルコスという、紀元一世紀にローマで活躍したギリシア人の文章に引用されているものです。プルタルコス自身がいった言葉ではありません。

つまり、人間には努力は必要なく、すべては人知を超えた運で決まる、などというのは正しくないというのが私のいいたいことです。プルタルコスもそう思っているのではし

う。だから、彼も先ほどの極端な言を引いたのだと思います。

人間の営み、職業、商売、営業、あるいは起業、学問や勉強を積み重ねた結果・成果。もし、そういった皆の行なっている営みは、努力が必要がなく、すべては人知を超えた運で決まるといわれたら、つらいものがあります。

ところが、ガザやレバノンの問題でも悲劇的な事象を見るとときに、「これはもう運というほかない」「彼らはそういう運命にあるのだよ」ということを気軽にいう人たちがいるのです。けれども、運命や運というものは、その言葉だけで簡単に使ってもらっては困るのです。人間の営みには正義も公正もないということになる。あるいは節度ということもない、秩序の正しさもないということになります。

ただ運に恵まれていたから、あるいは運があったから、古代ローマの小スキピオはカルタゴを落とすことができたのでしょうか。あるいは運に恵まれていたから、運だけで家康は天下を取り、そして西郷や大久保は旧幕府の軍隊を打ち負かして明治新政府を作ることができたのでしょうか。そんなことはないのです。

運だけに恵まれていたから勝った。あるいは運から見放されたから負けた。そういう見方は、私は「運」を歴史において論じたり、あるいは現代社会で問題を論じたりするとき、非常に単純な結論の仕方になるのではないかと思うのです。

「知」を磨かないと、運を引いてくれない

そこで大事なことは、私は「運」を考えると、あるいは「運」というもので物事を解釈するときには、思慮（ものを注意深く考える）、あるいは知恵（自分の持っている知識の量・知識の質）をやはり磨いていかないとダメだと思うのです。

歴史を見れば、人間の営みが成功する、あるいは失敗するにあたっては、人間自身による節制、そしてある程度まで正義、ある程度まで勇氣、こういうものが大きな要因になっていると思うのです。言い換えると、「運を引く張ってくる」という言い方を私は最初にしましたが、自分に良い運を引く張ってくるためには、日常から節制や正義、あるいは勇氣といったものを心がける必要があるのではないのでしょうか。

自分の胸に手を当て考えてみましょう。自分は普段、贅沢ぜいたくをせずに禁欲的に節制をしているか。そこで自分は欲望を抑えようという努力をしているか。あるいは自分には、人に対して押しつけるほどではないけれど、商売を広げていく、あるいは学問をしていくうえで、ある種の正義感（「これをやってはおしまいだ」というもの）が最低限はあるか。あるいは何か仕事を行なっていたときに、ただ保守的に自分の陣地だけを守っていても仕方

がないから、そこから一步飛び出す勇氣があるか。

マルクスが『資本論』で語った有名な言葉を引用すると、「ここがロドスだ。さあ跳べ！」というような、どこかで跳ぶ勇氣は、実際には知恵から生まれます。その知恵をまったく無視したり、教養といわれるようなものを軽んじたりしてはいないか、ということです。

学問的なことや学者と同じようなことをせよ、といっているわけではありません。この「教養」や「知恵」というものは、日本人ならばたやすく定義できます。それは日常における常識、日常における良識、日常におけるある種の不文律、日常におけるたしなみ、こゝろといったことを可能にするような「ものの判断のある種の集合」と申しましょうか。「判断を下すことのできる根拠の集合体」、これが「教養」や「知恵」ということになっていくわけです。

運を味方につけるための努力をすること

とかく運だけに頼っていきますと、「強い風が吹いた。強風によって巻き上げられた塵芥（ちりやあくた）などが風の吹くままに運ばれていく。そしてどこに着地するかわからない」という当てのなきを運想します。塵芥であれば、そのようになるかもしれません。ところが、たとえばゴルフなどを考えてもそうでしょう。強風など悪天候のときには、もう一方で打ち方の問題があるのです。うまくプレーするには、努力もしなければいけない。そこが、塵芥とボールの違いなのです。人間の意思が入って、風が吹いたときに、黙っていればボールはAという地点に着地するかもしれないけれど、それを人間の努力や技（スキル）によってBという地点に着地させる。

同じ強風が吹いたときでも、ゴルフボールの着地点と、塵芥あるいは砂がどこへ飛んでいくかまったくわからないということでは、違いがあるということなのです。いってみれば、良い方向に味方してくれる努力をして、良いシナリオを描いてくれることを可能にするように、風を味方につけていく。そのために思慮や知恵というものを磨いておかないとダメなのです。

いうまでもなく、そのようなスキルの高いゴルファーたちはやはり強く、低いゴルファーたちは弱い。あるいはそういう特性を考えていく必要性を認める人たちは成功していき、認めない人たちはダメだねということなのです。

「武運」は磨くことができるか

次に、こういうことに似た日本のケースを見ていきます。運にもいろいろありますが、侍たち、剣術家たちにとって大事な運は何だったでしょう。

宮本武蔵、柳生十兵衛、あるいはその種の人物たちにとって、金運が大事だったか、あるいは女運が良いか悪いかということが大事か。もちろんいずれでもありませんね。

彼らにとって大事なことは、武芸と一緒に並び称される「武運」です。つまり、実際の自分の剣術、あるいは戦いくさにおいて運が味方するかどうか。それを彼らは「武運」と呼んだわけです。

そうすると、次のことは彼らにとって永久の問いだったわけです。武芸というアート、そして武術というテクニクは、どちらが大切か。あるいはどちらも大切だとすれば、どうやって両立することが可能か。これはなかなか難しい問題です。

ちょうど五代将軍・徳川綱吉から八代将軍・徳川吉宗にかけて活躍した儒家（儒学者）に室鳩巢むろこぶさうという人がいました。江戸時代の人間たちも、この室鳩巢に対して問いを発したのです。室鳩巢は当時、一流の学者であり、かつ吉宗の政治顧問だったような人間です。

すると、彼は思いがけないことをいいました。

要するに、武芸というものは職業だから、稽古、トレーニングが大切なことはいうまでもない。けれども、「武運」というものが尽きれば、侍にとってどうしようもない。したがって、「武運」が大事なのだ。武芸はきちんと磨いて当たり前だ。けれど武運もきちんと磨くべきだ、と。

そうすると、普通の人間はここで疑問に思うわけです。「武芸を磨く」ということはわかる。練習を重ねていけば、ある程度まで剣術も強くなるし、人と戦っていくこともできる。しかし、「武運を磨く」とはどういうことか、ということなのです。

つまり、「武運を稽古しろ」と室鳩巢はいったわけですが、「武運を稽古する」とはどういう意味かということなのです。

それがいかにもわれわれ日本人の祖先、先人らしいことなのです。そもそもわれわれのような凡人たちは、室鳩巢の周りにいた人たちと同じように、次のように疑問を持ったわけです。「昔から、武芸はともかく、武運は稽古して得られるものではない。運は稽古して身につくものではない。稽古して得られるものなら、すでに励んでいる」と。常識に考えたとそうですよ。しかし、そうではないのです。

天は「仁」を好み、「不仁」を憎む

室鳩巢は「運というものはどこから出てくるのか」という反論・反問をします。皆さんはどこから出てくると思いますか。非常にシンプルなことだけれど、室鳩巢は「運は天から出てくる」と述べたのです。「天から出てくるということを知ったら、運を天に祈るしかないだろう」と。

これもまた何をいつているのでしょうか。室鳩巢ほどの学者がと、私たちは思うでしょう。当時の皆もそう考えたわけです。「運を天に祈るしかないのなら、何の稽古だ」というわけです。

しかし、ここから先が違うのです。「天から出てくるとすれば、天の心を叶えるために、天の好むこと、天の憎むことは何かを考えてみなさい」というわけです。

「天の好むことをやろうではないか」というと、われわれのようないい加減な人間は、「天も酒が好きはずだから。では一緒に酒を飲もう」というバカなことをいったり、「天は勉強も好きだから勉強しよう、座学をやろう」といった月並みなことを考えたりしますが、そうではありません。

天の好むことや憎むことは何か。天は「仁」を好む。儒教でいちばん大事な概念です。

そして「不仁（仁ではないこと）」を憎む。

天が大切に思うことは「仁」、つまり人が人を愛すること、そして人が仁である（人を大事に思い、人に対して慈しみを思う）こと。そういう心がけをもって人間関係をきちんと維持することが大事なのです。そして、世の中をよかれと思い、維持していく心を抱いて日々生きていく、仕事をする、商売をする、武芸に励む、そして学問をしていく。

こうすれば、天は喜ぶ。こうして、人と人とのあいだに「信」が置かれる。商売においても大事な概念である信（信用）、そして学者のいうことにも信（信頼）が置かれる。このようなことで、他人を欺かないですむのです。

これをずっと重ねていき、歳月が積み重なると、天はどこからか人を見ていて、そのような誠意や努力に応えて、自然と助けるかもしれない。

天の意思ですから、助けるとは断言できません。それは「運」として出てくる。「武運」として出てくる。しかし、「運」という要素は、断定はできません。

しかし、天に助けを自分本位に要求したり、断定的なことをいったりすると、功利的なことになってしまいます。そうではなくて、そこは謙虚でありなさいといっているのですね。

もしそういう努力を積んでいると、戦場において人は危険を脱する確率が高くなる。それから、なんといつても矢や石、あるいは鉄砲玉などにあたらないかもしれない。そのような可能性が高くなる。

世間においてはどうかというと、自分の利益だけを図って人に嫉妬ばかりする、そして自分の頭がいいことを頼りに人を欺く。こういったことが、短期的に見れば世渡りの早道・近道だと考える人たちも多く見受けられます。このような人たちは最後には結局、天に見捨てられる。だから稽古を日頃しないで、口先で祈ってばかりいる。「天よ、私に武運を与えてくれたまえ」と祈ってばかりいる。そして、稽古をしない。武芸をきちんと尊ばなければ、結果は出てこないのです。

そこで室鳩巢が結論的に述べた言葉が大変大事なことになります。「罪を天に獲れば、禱る所なきなり」。これは『論語』の八佾第三の二三にある言葉です。どういう意味かというと、天に対して罪を犯したなら、天以外にどこに対しても祈りようはないものですね、ということですよ。

「天に対して誠実でなく、もしそこで罪を犯したならば、お祈りしようといっても、天以外どこにお祈りするのですか」という孔子の非常に冷め切ったシニシズム、非常に冷め切った一種のニヒリズム的な要素さえ感じられる言葉です。非常に厳しいのですが、なかなかいい言葉ではないでしょうか。

東洋の「仁」と「運」、古代ギリシアの「アレテー」と「テュケー」

少し日本の話が続いたので、ギリシアの古典に戻りましょうか。

先ほどの話で「運」「仁」という言葉の意味をおわかりいただけたと思います。結局、「運」を引いてくるのは、どの時代においても人間関係を大事にし、人と人との結びつきにおいて不実がないこと（「仁」という概念）です。

もちろん商売を行ない、学問的な論争を進めるなど、どこにも競争はつきまとうわけですよ。そこに競争や論争のルールがあつて、それを守りながら、勝負が決まることはやむをえない。問題は、人と競うときのルールが「不仁」であつてはいけない、ということですよ。

基本的に人同士の信頼や人同士の慈しみというものを持っていなければいけない。そうしないと、子孫は栄えられないというわけです。これはなかなか大事な発言です。

中国や日本でいう「仁」という言葉は、西洋の概念でいうと何か。日本語に訳せば「道徳」という言葉に近い。道徳についてわれわれは「モラル」という

言葉を使うのだけれど、もともとの言葉はギリシア語の「アレテー」にさかのほります。

基本的にその人の身に備わった徳を表わします。そして、特に勇気であるとか、武勇であるという資質を美しい資質（美質）として表わす言葉。これがいわば「道徳」です。

その「道徳」をさかのほった元の言葉が「アレテー」になっていく。現代の日本語に訳せば「道徳」というこの言葉は、もともとの漢語、あるいは近世以前の日本人が使った言葉でいうと「仁」に近いと私は思うのです。

「道徳」の対照的な言葉は、古代のギリシアの思想や文学に登場してくる「テュケー」という言葉です。

この「テュケー」という言葉は、「運」や「運次第」を意味し、「運命」も意味しました。この「テュケー」と「アレテー」というものが非常に巧妙に組み合わせられて、西洋古典に出てくる概念が生きてくるのです。

皆さんがよくご存じの「運」とは、ギリシア語の系統から入っている言葉ではなく、ラテン語から入ってきている言葉です。「フォルトゥーナ」、すなわち英語の「フォーチュン」という言葉です。「フォーチュン」とは幸運、まさに「運」という言葉です。

日本語で「運」と「運命」とは厳密に区別する場合もあるけれど、ほとんど同じように使う場合もあります。同じようにギリシアの古典でも、良運なのか悪運なのか、あるいは幸運なのか不運なのか。どちらとも判明しない場合は、日本の西洋古典学者たちは「アレテー」や「テュケー」という言葉をそのまま使います。これは今日少し話したなかで、いちばん理屈っぽい話です。最終的にはそれほどこだわらなくてもいいことなのですが、一応、日本の西洋古典学者は大変高い水準でこういう翻訳をしているのです。

ですが、ここで私が触れたかったことは、その「アレテー」の言葉をさらに日本語に訳した場合です。「道徳」という言葉が中国人の使った、あるいは江戸時代に使われた「仁」という言葉に近いだろうということをお話ししておきたいということです。

「運と知はどちらが勝っているのか」という疑問に答える

一つの疑問がここに出てきます。古代からヨーロッパ人の祖先たちを悩ましてきた問題と関連します。

「運と知はどちらが勝っているのか」

偶然的な要素として、われわれの目の前に結果が出てくる「運」と、それから「努力」と。あるいは、結果として現われないと自分たちではわからず、見ることもできず、解釈もできない「運」というものと、後天的なことであって自分たちの目にも触れることがで

きるし、自分たちで理解もできる、形にもなっている「知」という要素と。そのどちらが重要であるか、優れているか、勝っているかという問題です。

世界中のどの国、どの民族においても、一般論としていうなら、「勇気」という言葉を例にとると、勇気は偶然の「運」からわれ知らず発揮されるかというところ、そうではありませんが。勇気を発揮していくにあたっては、誰にだって「怖い」という恐怖の観念がありません。

戦争といった非常事態だけではなく、日常のわれわれの生活のなかでも恐怖が出てくることがあります。たとえば、電車のなかで刃物を持って暴れ回るような人間が出てきたらどうするか。あるいは駅前での大量殺人などといった事件が起きたときに、自分がその場にいたらどうするか。これは自分の問題としても考えなければいけません。

また、まさにここで、われわれの年齢という問題が出てきます。私のような七〇代になったときの判断の仕方と勇気のふり方はどうか。まだ三〇代、四〇代という、家族のため、さらに日本の社会のためにも頑張らないといけない世代と、一つの大きな仕事を終えつつある、もう義務を果たしたといってもよい世代では違うかもしれません。

いずれにしても、「勇気」を發揮していくことについても、ただ偶然から發揮されるものではないのです。その發揮は功利であるといったことではなく、やはり知性や節度、後天的な努力や節制によって、その判断が得られていくのではないか。

「勇気」とは意外と先天的な要素のように思われているけれど、そんなことはありません。後天的に得られるほうがむしろ要素としては多い、ということをや西洋古典などでは語っています。

西洋史で最も運に恵まれていた人物とは誰か

たとえば、いちばん勇気があった西洋史の人間は誰だと思いますか。

運にも恵まれていた。勇気もあった。知性もあった。世界でも有数の帝国をつくった。女性にもモテた。行く先々で、ギリシア人だけではなく、ペルシア人、最終的にはインド人、あるいはセム系、すなわちユダヤ教徒、シリア人、エジプト人の女性にもモテた。ここでは通婚し、民族を融合していった。そういう男性です。何よりもこの男には、悔しいほど勇気があった。

この世界最大のモテ男にして勇気のある人間。それは、アレクサンドロス大王です。アレクサンドロスは、誰もがすごいという。何がすごいのか。彼は、知性や節度というものを後天的に持つことができた人間の代表例です。

彼は東へ遠征していくあいだに、片時も『イーリアス』『オデュッセイア』といったホメロスの書物を手元から離さなかった。それは、私たちのように余暇を楽しむ、あるいは気晴らしのために読んでいたのではありません。彼は常に「勇気とは何か」「知性とは何か」ということを様々な実例で確かめるために、本から刺激を受けたのです。自分も確たる人物でなければならない、と。

だから、アレクサンドロスの遠征を成功させた原因は何かというと、実は知力だったという解釈をする人も多いくらいです。

アレクサンドロスの先生は誰でしたか。アレクサンドロスの史上最強の家庭教師です。そう、アリストテレスです。アリストテレスが授けた哲学の教えが最も生きたのは、アレクサンドロスだったでしょう。

ですから、アレクサンドロスは、単に運が強かったわけではありません。運も強かったけれど、その運を引いてきたのは、彼が東方世界を教化し、そして東方世界を支配していくために、多くの必要な知識を持ち、自分の征服する範囲のペルシア人の子弟、あるいはエジプト人の子女たちから尊敬されるような教養や知力を段階的に、かつ拡大的に得ていたという点が大きいのです。

そうすると、ペルシア人の子どもたちが自然とギリシア語でソフォクレスやエウリピデスのようなギリシア三大悲劇を読むなどといった風習が生まれて、融合する。そうしてできた東西融合文明がヘレニズムです。

ヘレニズムができて、ガンダーラ文化の仏像のひだや表情が、西方ギリシア風の雰囲気醸し出していきます。それから、法隆寺などの柱廊等々にも影響を与えています。円柱胸部に少し膨らみを持たせるエンタシスは、まさにヘレニズムの東への波及から、中国(隋・唐)を経て日本にも伝播したのをご記憶の方も多いでしょう。

東西両文明の融合を可能にしていたヘレニズムの要素を、万人に共通する個性、そして結婚、衣食住、風習を通して、出産や子どもを通して、多様な血を混じりあわせて広げていった。多様な文化を混じらせていった。運任せに戦争に訴えるということとはなかったのです。

西においても、東においても、運が命じるところ、非常にいきあたりばったりで統治してきたような従来の王朝に多い支配のパターン、それを廃絶して、あのような大帝国をつくっていったのです。

知恵や教養があつてこそ「運」は引っ張られてきた

それらを詠った詩として象徴的なものを引用します。

「さながら巨大な友愛の混酒器（クラテール）のなかでさまざまな生活、特性、結婚、風習を混ぜ合わせ、彼は人の住む地（オイクローメネー）をすべて自分の故郷と見なすよう命じましたし、遠征中の陣営を城塞（アクロポリス）とも要塞とも思い、また善人を身内の者、悪人をよそ者と見なすように求めました」

善人は善人なのだ。ペルシア人だろうとギリシア人であろうと、善人は善人、悪人は悪人だ。ペルシア人やギリシア人であるかは関係のない属性だ。力のある人間、良い人間、そして善人がレベルの高い人間なのだということを讃えた。そういう詩なのです。

したがって、アレクサンドロス大王は、こういった意味でいうと、われわれが誤解しがちなように、ただ勇気があるとか、ただ運があるということが独立してあつたのではなく、政治や治世のなかにきちんとした知、あるいは教養を得ていったということです。

だから運は、運としてだけではありません。知恵や教養というものがあつてこそ、運は引っ張られてきたのだという最大の例としても、アレクサンドロスは大した歴史上の人物だったということなのです。

まだまだ語るべきことはありますが、今日はこのくらいにしておきます。ご参考になつたかどうかは不安です。今日のセミナーでありがたいことは、私にも「運」という問題を歴史学者として考えなければいけないという気づきを与えてくれたことです。それに対して、感謝して終わりたいと思います。